

〈合評会〉川瀬和也『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』（晃洋書房, 2021）第 I 部

飯泉 佑介

1. はじめに

本論は、川瀬和也氏の著作『全体性と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』（晃洋書房、2021年）の第 I 部（第 2 章・第 3 章・第 4 章）を論評したものである¹。最初に各章の内容を要約し、それぞれの章に対して簡単にコメントを加える。その上で、最後に第 I 部全体に関わる疑問点を提起したい。

予め評者の総評を述べておこう。本書の評価されるべき点は、何よりも、ここ 30 年の英語圏のヘーゲル研究を正面から引き受け、ヘーゲル論理学の新たな読解を描こうと試みている点である。これまで本邦では、世界的な研究潮流である「ヘーゲル・ルネサンス」について、部分的に紹介されたり検討されたりすることはあっても、その路線に沿った一冊の研究書が刊行されたことはなかった。その意味で、本書は、日本のヘーゲル研究史において一つの明確な里程碑を刻んだと言ってよい。

また、論旨が明確で追いかけてやすいというところも特筆すべき点である。日本語で書かれたヘーゲル哲学に関する近年の文献全体を見回しても、これほどわかりやすく議論（いわゆるアーギュメント）が展開される著作は多くない。「ヘーゲルのテキスト以上に難解なヘーゲル本」さえ見受けられる中で、本書のスタイルは好感を持って受け入れられるだろう。

とはいえ、最新の研究が取り入れられていたり議論がわかりやすかったりするからと言って、正当な主張が展開なされているとはかぎらない。残念ながら本書には、論理学の基礎的読解に関して精緻さに欠けると思われる点が少なくないし、肝心の著者の主張も輪郭がぼやけてしまっている。（第 II 部や第 III 部と比較して、特に第 I 部にその傾向が著しいと言えるかもしれない。）行間からは、テキストの文言を前後の文脈から読み解くことよりも、流行の研究状況の中で自らの立場を打ち出したいという思いが滲み出ているように感じる。だが、それにもかかわらず、著者が提示しようとする新たなヘーゲル像は明瞭ではない。本論では、その理由のいくつかを明らかにしたい。

2. 第 2 章の要約

¹ 2021 年 12 月 10 日に京都大学西洋近世哲学史専修において川瀬和也『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』合評会が行われた。本論は、評者がそこで発表したレジュメに大幅に手を加えたものである。

第2章「ヘーゲル・ルネサンス」は、本書全体の見通しをつけるために、1990年前後以降の英語圏におけるヘーゲル研究の議論状況を整理し、その論点を抽出している。主に扱われるのは、(P. レディングの整理するところの)非形而上学的な「ポスト・カント的解釈」とそれに応答する「修正版形而上学的解釈」である。

まずは、ポスト・カント的解釈の主要論点が、R. B. ピピンの議論を軸に4点取り出される。第1の論点は、〈ヘーゲルの理論哲学は全体として、カントの批判哲学と同じく、認識論を存在論に先行させる認識論先行型のモデルによって再構成できる〉というものである(35)²。ピピンによれば、ヘーゲルの立場は「世界精神」の形而上学や「弁証法」の論理学といった「曖昧な」議論ではなく、「カントの反経験論的、反自然主義的、反合理主義的戦略を拡張し深化させる」(37)ものとして捉えられる。

第2にピピンは、〈ヘーゲルが、「客観的な認識の成立のためには超越論的観念論の総合統一の働きが必要である」というカントの主張を受け入れている〉と考えている(37)。このとき「総合統一の働き」を表すカント的主体は「自己意識的」とされるが、このうち「自己意識的である」とは、対象を表象しているときに自分の表象作用を意識できるという意味で解されなければならない。このように理解された統覚は、「グリーンスハイム筆記録」の精神哲学講義に記されたヘーゲルの自己意識概念に類似しており、ヘーゲルがカントの統覚概念を受け入れていることを裏付けている(38)。

第3に、ポスト・カント的解釈では、〈ヘーゲルは、「直観の働きとしての感性と思考の働きとしての悟性は明確に分かれており、直観的悟性は存在しない」というカントの主張を否定する〉と考えられている(43)。直観と悟性を統合した直観的悟性を理解するためには、セジウィックの解釈を参照する必要がある。セジウィックによれば、ヘーゲルは、カント哲学がカテゴリーなどの形式を欠いた素材を想定しており、そうすることで形式は客観性を失い、客観的認識そのものが不可能になってしまうとカントを批判している(45-47)。それゆえ、ヘーゲル自身の哲学では、客観的認識に到達するために直観的悟性が認められていることになる。

他方で、第4にピピンやセジウィックは、〈直観的悟性の存在を認める議論はカント哲学に対して外から持ち込まれたものではなく、カントの議論を深化発展させる中で到達されたものである〉とも主張している(49)。ピピンは、『純粹理性批判』B版の「カテゴリーの超越論的演繹」後半部に基づいて、カントが悟性を「与えられた直観一般の多様」に対して「統一」を「指定する」ものと捉えていることなどから、直観が客観によって規定されている側面を切り出し、直観と悟性の峻別というカントの公式見解が崩れていることを指摘している(52-54)。このようにポスト・カント的解釈は、単にヘーゲルとカントの共通点や相違点を指摘しているだけでなく、ヘーゲル哲学をカント哲学の深化発展として解釈している。

² 本論の括弧で囲われた数字は、『全体論と一元論』のページ数を表す。

ところで、修正版形而上学的解釈をとるスターンによれば、ピピンは、存在についてのヘーゲルの言明を自己意識に関するものと強引に解釈している（56-57）。また、ピピンの解釈では、ヘーゲルは、心（自己意識）と世界（存在）の二分法を除去する一方で、自己意識の条件を探究する超越論的方法に固執していることになるが、むしろ存在から出発する形而上学的方法を採っていると理解するべきだとスターンは主張する（57-58）。

しかし、著者によれば、そもそもヘーゲルの哲学は、スターンが持ち込んだような、形而上学的方法か超越論的方法かという二分法にはそぐわない（58）。現代の英語圏のヘーゲル研究では存在論か認識論かという点が論点になっているが、そこで見落とされている「ヘーゲル哲学の全体論的性格」に注目し、その観点から解釈論争の枠組みそのものを見直さなければならない（59-60）。

3. 第2章へのコメント

第2章は、本書の議論が置かれるべき研究上の文脈を説明し、議論の先行きを示す導入である。評者の見立てでは、この10年間で日本における「ヘーゲル・ルネサンス」の紹介と研究は急速に進展し、その重要性はすでに十分認められている。とはいえ、冒頭で述べたように、著作レベルで取り組まれた研究はこれまで存在しなかったのだから、この分野の第一人者である著者が研究動向の説明に力を入れるのも頷ける。その分、第2章では、ピピンやセジウィックによるカント／ヘーゲル解釈の整理に紙幅が費やされ、著者のオリジナルな解釈や主張はほとんど見受けられない。

それだけに、英語圏の研究者たちによるヘーゲル解釈が第2章の議論の前提となっており、その妥当性がほぼ検討されていない点には注意が必要だろう。無論、そもそも本書の狙いは「ヘーゲル・ルネサンス」の土俵に乗ることにあるのだから、土俵は土俵として受け取るべきだとも言えるかもしれない。しかし、ヘーゲルやカントのテキストに照らして正当と言えない主張まで、著者が引き受ける必要はあるのだろうか。

例えば、直観的悟性をめぐる議論である。確かにカントが否定し、ヘーゲルが認めた直観的悟性をどのように理解するべきかという点は解釈上の論点となりうる。だが、管見の及ぶかぎり、ヘーゲルが直観的悟性を取り上げているのはイェーナ時代初期のカント批判の文脈だけである。（類似した意味を持つ「超越論的直観」や「絶対的直観」まで広げても、その使用例はイェーナ時代に限られるだろう。）そもそも先行研究でも指摘されているように、ヘーゲルが直観の積極的意義を認めていたのは『精神現象学』以前であり、後年は直観が「思弁的思考」の一契機をなしているとは言えるとしても、カントの議論に接続するような仕方ですら「直観的悟性の存在を認めている」と理解することは難しい³。

³ 一例として、『ヘーゲル事典』の「直観」の項目を挙げる（田端, 337-338）。

少なくとも日本の研究者の間では、こうした見方が通説である。しかし、他方で、英語圏の研究において、しばしばヘーゲルにおける「直観的悟性」や「知的直観」といったテーマが認められているのは事実である。これは、ヘーゲル哲学を神論的・宇宙論的な観念論として再評価した 20 世紀初頭の英語圏のヘーゲル主義、つまり、「イギリス観念論」の名残だと、評者は推測している。「神的直観に基づく絶対的観念論」といった過去のイメージに対抗するために、——実際にはヘーゲルはそのような議論を展開していないにもかかわらず——、良くも悪くも「直観」概念に焦点が当てられてしまうのである。こうした「ヘーゲル・ルネサンス」の当事者たちが気付いていない「歪み」があるのだとすれば、それを明るみに出すことも、本書のような趣旨の研究に求められる役割の一つだろう。

もっとも、こうした問題はヘーゲルのテキストから照らして初めて判明することである。それはそれとして、「ヘーゲル・ルネサンス」の土俵からはどのような新しいヘーゲル像が得られるのだろうか。第 2 章の結論で予告された、「形而上学的方法」と「超越論的方法」、存在論と認識論の二元論に陥らない解釈、つまりはポスト・カント的解釈と修正版形而上学的解釈を「調和」させる解釈は、極めて魅力的である。この著者の解釈の要諦をなす「ヘーゲル哲学の全体論的な性格」こそ、次章の主題である。

4. 第 3 章の要約

第 3 章「概念の全体論」は、『大論理学』概念論の「概念総論」後半部を読解し、ここでのヘーゲルの議論が全体論的性格を持っていることを明らかにする。すなわち、ヘーゲル哲学は、カントによるカテゴリーと経験的概念の区別を取り払い、全ての概念が相互に関連し合いながら働いているというラディカルな全体論である。

ヘーゲルは「概念総論」後半部で、「俗流の心理学的観念」と「カントの超越論哲学」が、所与としての直観を客観的・実在的なものと見なし、概念を主観的なものと見なしていると批判する（64-65）。この批判は、マクダウェルによる「所与の神話」批判と軌を一にする。マクダウェルは、自発性の能力としての概念能力は経験の隅々に行き渡っていると考えており、例えば、「白」の概念は、概念形成以前の多様な所与から抽象によって取り出される、という見方を否定する（65-67）。

さらに、ヘーゲルは、①所与としての直観ではなく、思考された対象こそが客観性を持つ、②概念はそれ自身で客観性ないし実在性を持つ、と主張している。①の根拠は、ヘーゲルが「感性的な対象から思考された対象へと作り変えられる」と述べている点にある（71）。②の根拠は、「対象を概念把握する対象認識は、対象が即かつ対自的にある仕方での対象認識であって、概念は対象の客観性そのものであるはずだ」と述べている点にある（72）。

「感性的対象」が「思考された対象」に作り変えられるというヘーゲルの主張は、『大論理学』本質論と関係付けられており、現象をその本質との反省的構造を伴ったものとして把握することを意味する(72-73)。また、概念論によれば、概念は、普遍、特殊、個別の全ての契機を含んでおり、全体論的な構造を持っている。その意味するところは、「伝統的な思考様式」のように、最近類と種差によって概念が規定されることだけでなく、この類と種によるネットワークが、個物、つまり、実在的なものをも含んでいることである(73-76)。したがって、対象が思考された対象となり、本質と現象との反省的関係において把握されるとは、対象が概念のネットワークの中で、様々な他の物や概念との関係の中で捉えられることを意味する。

しかし、このように対象の認識は概念の全体論的構造の中に位置づけられて初めて客観性をもつと理解すると、すでにマクダウェルが指摘していたように、「経験における判断」が「外在的な実在」と関わることなく成立してしまいかねない(76-77)。この問題を解決するために、ヘーゲルは判断が経験を通じて改訂される可能性を保証するが、それは概念と直観を区別し、直観が外界に関わることによって改訂されるというカント的な道筋ではない(78)。ヘーゲルは、本質論で現象と概念が反省的であり相互依存的であると主張しており、それによれば、概念の全体論的構造は、直観に関わることなく、どのような経験が生じ、それゆえどのような対象が現れてきたのか、ということに応じて改訂されうることになる(78-79)。

概念の全体論的構造と経験を通じた構造の改訂というヘーゲルの主張は、ア・プリオリな概念としてのカテゴリーの特権性を認めないという点で、カント哲学からの決定的な離反を意味する。カントは、純粹悟性概念としてのカテゴリーに対する全体論的改訂を受け付けられないからである(81-82)。しかし、ヘーゲルの場合、論理的カテゴリーと経験的概念は本質的に区別されない(82)。このように、ヘーゲルの提示した概念の全体論的構造は、その外部に固定的で非経験的なカテゴリーと認めない点で、よりラディカルな全体論である(87)。

5. 第3章へのコメント

第3章は、前章で予告された「ヘーゲル哲学の全体論的な性格」を主題とする。それは、ポスト・カント哲学的解釈に依拠しつつも、著者が独自に展開するヘーゲル解釈に他ならない。

ところが、この「概念の全体論的構造」ないし「概念のネットワーク」についての本章の説明は十分ではなく、しかも不明瞭である。なるほど、前半ではヘーゲルのカント批判や「思考された対象」といった表現をもとに非所与説的な認識が論じられているものの(64-72)、それはこの種の認識が可能であり必要であるという指摘にすぎない。構造そのものが主題化されるのは、「概念総論」と本質論のごく一部を根拠にし

た議論のみである。そこで著者は、概念が普遍、特殊、個別の契機を含んだ全体論的構造を持っており、対象はそうした「概念のネットワーク」の中で他の物や概念と関係付けられると主張する（73-76）。しかし、テキスト解釈としての妥当性は別にしても⁴、一つの概念に普遍、特殊、個別の三つの「契機」が含まれていることと、ある概念が「様々な他の物や概念」と関係付けられていることは同じ事柄を指すのか、何の説明もなく「概念のネットワーク」の一部に「物」が導入され、「概念」と同列に並べられているのは正当なのか、といった無数の疑問が浮かんでくる。残念ながら、本章で主張される全体論的構造は、要素が相互に依存したネットワークという素朴なイメージを与えられているだけだと言ってよい。（確かに「これは白い犬である」という判断を例にとった具体例は登場するが（76）、具体例は具体例であり、一般的な構造の説明ではない。）「概念のネットワーク」の外部が正面から語られないこともあって、何がネットワークの要素に該当するのか、どのようにしてネットワークが形成されるのかといった基本的な点からして明らかではないのである。

同じことは、全体論的構造の「改訂」についても言える。著者は、本質論で「外的反省」が否定されていることを根拠に、ヘーゲルが、カント的な直観と概念の区別を批判しながらも、「経験によって概念の全体論的構造が改訂される」可能性を保証したと主張する（78-79）。だが、仮にこの解釈を認めるとしても、どのような仕方で改訂されるのかと問われれば、それに対する回答は見つからない。そもそも経験（直観）と概念の区別を認めないにもかかわらず、どのようにして「経験による概念の改訂」が行われるのだろうか。おそらく著者は、この改訂を理解可能なものにするために（本文では「結論」（82）とされるが）、唐突に「ヘーゲルは論理のカテゴリーと経験的概念を本質的に区別していない」という驚くべき主張を展開する（82）⁵。このテーゼが

⁴ ヘーゲルのテキスト解釈としての疑問には次のようなものが挙げられるだろう。「概念が自己の外へと出て、現実性へと歩み入る」という論述は、概念ではない何か「物」のことを指すのではなく、概念一般（普遍・特殊）が一つの概念（個別）として個別化されることを意味するのではないか。「概念のネットワーク」という理解では、普遍、特殊、個別を貫く「弁証法的運動」は無視されているのではないか。最後の疑問点は、本論末尾で再度提起している。

⁵ この主張に対しては、四つの根拠が挙げられている。すなわち、1) カテゴリーではなく、概念を好むヘーゲルの用語法、2) 存在論や本質論と概念論との関係、3) カントの「ア・プリオリな総合的判断」についてのヘーゲルの解釈、4) 絶対的形式の学としての論理学の特徴づけ、である（82-87）。しかし、このような主張が、ヘーゲルのテキストの読解として不正確である、あるいは、少なくとも「我々の目の前にあるテキストはまさに『論理の学』というタイトルを持った、論理のカテゴリーについての書ではないのか」（82）という当然の疑問を覆すほど説得的ではないということについて触れておこう。1は、論理のカテゴリーと経験的概念を本質的に区別していないことの原因にはならない。2は、存在論・本質論と概念論の区別を前提にしているのだから、そのかぎり、むしろ重要な区別があることを裏付けている。3は、ヘーゲルの言う「あらゆる多様性」や「種的な規定性」を「経験的概念の領域に属する様々な規定性」と解釈しているが、カテゴリーにも種類があることから分かるように、「経験的概念」を指す根拠にはならない。4に関しては、一般にヘーゲルの用語法において「豊かで具体的なもの」は、経験的なものではなく、むしろ規定性を豊かに備えた高次の概念を指すのだから、論理学の経験的性格を表すと解することは難しい。

辻褃合わせのような外観を呈してしまうのは、その論拠がバラバラの典拠や観点からかき集められているからだ、ともあれ、本章ではそもそも「概念」や「経験」や「経験的概念」といった用語が明確に規定されていないため、「経験による概念の改訂」の実態はますます不明瞭になる。

結局のところ、本章が明らかにしたと言えるのは、ヘーゲル論理学の概念総論で示された「概念の全体論的構造」という考え方には、経験的認識に関する「全体論的」モデルに通じるものがあるということ以上ではないと思われる。このような認識論的理論は、著者自身、本質論と概念総論の一部しか典拠にできなかったように、少なくとも、ヘーゲルが論理学で紙幅を割いて論じている事柄ではない。そうした解釈資源の乏しさを補って「全体論的構造」の内実を説明するには、マクダウェルが唱える認識論的ホーリズムを引き合いに出さなければならない。したがって、結論として見えてくる新しいヘーゲル像は、限りなくマクダウェル化された、あるいはさらに遡ってクワイン化されたヘーゲルの姿となってしまふ。そこでは、本来の哲学を「概念」ないし「絶対者」の自己展開としての体系哲学と見なすヘーゲル自身の主張は完全に蚊帳の外に置かれる。

もっとも、ヘーゲルの哲学を解釈するのに、ヘーゲル自身の哲学観に依拠する必要はないのではないか、という異論も聞こえてくる。なるほど、著者の言う「ヘーゲル哲学の全体論的な性格」が人間の認識のあり方の「全体論的な性格」を指すのであれば、ヘーゲル哲学そのものの「全体論的な性格」を取り上げなくても何ら問題ではないかもしれない。ところが、次章に入ると事情が変わってくるのである。

6. 第4章の要約

第4章「認識論と存在論の弁証法」は、ポスト・カント的解釈の枠組みでは捉えきれない論点として、『大論理学』「絶対的理念」章を取り上げる。「絶対的理念」章では学問的方法や弁証法が論じられているため、この箇所を読み解くことは、ポスト・カント的解釈と形而上学的解釈との対立を調停するだけでなく、哲学においてとられるべき探究方法を明らかにすることを意味する(91)。

ピピンは、「絶対的理念」章では、感性的経験に関わることによって理性はアンチノミーに陥るとするカントの主張に対して、概念自身による概念的領域への制約、つまり、理性の自己変容による規定を強調するヘーゲルの立場が現れていると指摘する(92-95)。このときピピンの理解する絶対的理念とは、「自己を知る概念」(92)に他ならない。しかし、形而上学的解釈の論陣を張るクライنزによれば、こうしたピピンの解釈をとると、ヘーゲル論理学は主観の側の能力や構造について説明するだけとなり、客観的な世界の側については何も説明できない(95)。そこで、クライنز自身は、論理学は認識批判に先立つ「絶対的なもの」から出発しており、そのような「絶

対的なもの」が自己把握する円環であると主張する(96)。こうしたクライNZは、ヘーゲルの論理学を(実体の形而上学ではなく)「理由の形而上学」と解釈するが、この解釈によって主観と客観の統一としての理念は適切に理解できるように思われる(97)。

クライNZ的な理念の理解は、「絶対的理念」章で叙述される弁証法の解釈によって裏付けられるが、その際、加藤尚武が指摘するように、弁証法が「主観客観二元論の克服と不可分」であることに注意しなければならない(97-98)。ヘーゲルによれば、弁証法の種類としては、対象や認識作用に関する弁証法だけではなく、それらについての諸規定、例えば、有限性と無限性についての弁証法もある(98-99)。ヘーゲルの考える弁証法の要点は、主観と客観の区別を前提した上でいずれかを批判するのではなく、この区別を超えた論理的な諸規定そのものを批判し、それが無根拠であることを明らかにする点にある(100)。

こうして理念は主観と客観の二元論を克服しており、そこから新たに「主観や客観として区別されたもの」と「絶対的なもの」の二元論を生み出すことはない。なぜなら、ヘーゲルの絶対的理念は、それ自身のうちに「区別されたもの」を含む「同一性と区別との同一性」だからである(103)。しかし、主観的なものでも客観的なものでもなく、「論理的なもの」から始めるというヘーゲルの方法は、それを確固たるものとして捉えず、「暫定的なもの」として導入するものと理解しなければならない(103-104)。実際にはヘーゲルは、「論理的なもの」を絶対的な始元であり終点であると主張しているが、それは「論理的なもの」によって主観と客観を基礎付ける描像を生み出してしまう(104)。

この新たな二元論ないし基礎付け主義を回避するためには、ヘーゲル哲学体系を、「始点と終点と一定の方向を持ったベクトルモデル」や「特定の始点も終点も持たない円環モデル」ではなく、「各要素が相互的なネットワークを形成した有機体モデル」として解釈すればよい(105-107)。円環モデルは、二元論や基礎付け主義に陥りかねないベクトルモデルより優れているが(107)、著作の目次のとおり、概念が必然的に展開し移行するというヘーゲルの主張は「途方もない」ものであり、それを否定できない円環モデルは支持されえない。

こうしてヘーゲル論理学は、主観的なものでも客観的なものでもなく、「論理的なもの」から始めるものの、それさえ「暫定的なもの」であり、いずれも哲学的な議論の絶対的な根拠とならず、相互に補い合うような哲学である。したがって、形而上学的解釈もポスト・カント的解釈も、いずれも正しくヘーゲル哲学を理解しているとはいえない。現代哲学でも、形而上学に先立って認識批判が必要か、直接に存在を語る形而上学から始めるべきかという論争があるが、ヘーゲルの洞察はこうした問題状況に一石を投じうる(109-111)。

7. 第4章へのコメント

第4章では、修正版形而上学的解釈に接近するため、これまでの議論とは異なり、ヘーゲル論理学の体系構成や方法論に焦点が当てられる。その結果、第3章では、「この犬は白い」と判断するときの認識のあり方が「全体論的構造」ないし「概念のネットワーク」をなすと論じられていたのに対して、第4章では、論理学そのものの各要素がネットワークを形成していると主張されることになる。

評者としては、もちろん、ヘーゲル論理学を（表象の集積体ではないという意味で）「概念のネットワーク」と理解することに同意する。しかし他方で、本書が、ヘーゲル的な「概念のネットワーク」を特徴付ける根本的な性格を悉く否定する点には驚きを禁じえない。すなわち、「概念の必然的な展開」や「移行の論理」、「円環」の構造などは完全に否認されてしまうのである（106-107）。

もちろん、ヘーゲルが述べていることを全てそのまま正しいと考える必要はないし、そうすべきではない。だが、重要なことは、明らかにヘーゲルが最も精力を注いで探究していた論点を、その負荷に耐えられるほど十分に吟味して退けているのかどうかである。この点になると、著者の考察は甚だ心許ない。なぜなら、著者の「反論」の根拠は、「現代において全てを手放しで受け入れられるようなものではない」、「ダジャレによって議論が展開しているとしか思えない箇所も多々ある」、『大論理学』や『エントュクロペディー』は版によって構成が異なる、といったものに留まるからである（106-107）。こうした「反論」は、およそテキストによる検証や哲学的吟味と呼びうるものから程遠く、むしろ「ヘーゲルの形而上学的な叙述を全て「筆の滑り」として処理してしまう」ポスト・カント的解釈の「あまりにも荒っぽいやり方」（58）に近いだろう。当然、実際に残された各版の著作の記述とそこで表明されている方法や体系の理念（構想）は別物なのだから、概念の運動や体系の展開の論理を原理的に検討した上でなければ、ヘーゲルの方法論の成否を評価することはできないはずである。

ここで、もう一つ指摘しておきたいことがある。論理的諸規定やその連関の必然性や絶対性を否定する代わりに、本書は、それらが「無根拠である」（100）、「暫定的なものである」（103）と主張するが、この主張は、それ自身、十分な根拠がないだけでなく⁶、その他の規定、つまり、「有機体モデル」（107）、「相互に補い合う」関係（109）とは相性が悪いということである。確かに、生物個体に代表される有機体は、部分同士や全体と部分が相互依存・補完の関係にあるが、だからと言って、「暫定的」だったり「無根拠」だったりすることはないだろう。私の手や心臓は私の身体において相互に関わり合い補完し合って機能しているのであって、それは、絶対的とまではいえないにしても、かなり強力な必然性と根拠を伴っていると考えべきである。著者はこ

⁶ 実際、ヘーゲルは、暫定的なものから出発するのではないということ、イェーナ時代の『差異論文』から『大論理学』の始元論まで繰り返し主張しているが（GW4, 82-83, GW11, 35, GW21, 58）、本書は一顧だにしない。

うした関係規定を一緒くたにして、「あまりにも荒っぽいやり方」で片付けてしまっているように見える。

こうした姿勢の背景にあるのは、とにかくヘーゲルの言う「必然性」や「絶対的なもの」を排除したいという願望だろう。それ自体は、決して珍しいものではない。相対主義や構築主義に親しんだ現代人の一般的な見方であるのみならず、近年のヘーゲル研究者にもしばしば見てとられる傾向である。しかし、ヘーゲル哲学の専門家であれば、例えば、以下のような解釈を検討してもよかったのではないだろうか。すなわち、著者は少なくとも、論理的規定性が「有機体モデル」に従って関係づけられていることを認めているが、まさにそうした関係の全体こそヘーゲルにとって「絶対的なもの」だったのではないか、そして、論理学の課題は、経験的認識の構造を解明することではなく、そうした概念関係の絶対性を論証することだったのではないか、と⁷。もっとも、初めから概念の運動や論理学の構成を十分真面目に受け取る気がないならば、こうした着想に至る可能性もまずないだろう。

8. 第 I 部全体に関わる疑問点

以上の各章の要約とコメントを踏まえて、本書の第 I 部全体に関わる疑問点を三つ提示したい。

(1) ヘーゲルの「概念」について

第 1 の疑問は、ヘーゲルの「概念」とは何であるのか、というものである。著者が断るように、これは「非常に大きな問い」(74)ではあるが、ここで問いたいのはそれが「全体論的構造」を持つかどうかということではない。(概念論に従うかぎり、概念が普遍、特殊、個別の契機を含んでいることは当然であり、それを「全体論的構造」と呼ぶのであれば、この主張に議論の余地はない)。そうではなく、著者の言う「ヘーゲルの概念」は、経験的概念一般を指すのか、『大論理学』で規定されている概念を指すのか、それとも、その他の何か、あるいは、これら全てを指すのかという点である。

この点について、第 3 章の議論が不明瞭であることはすでに指摘した。著者によれば、ヘーゲルは論理学において「論理的カテゴリーと経験的概念との間に本質的な区別はない」と考えている。そもそも何が本質的で何が非本質的なのが説明されていない以上、「本質的な区別はない」という規定からして曖昧だが、仮にこの主張を、ヘーゲル論理学が経験的概念を扱っている(扱いうる)という主張と解することにしよ

⁷ こうした見方は、本書で参照されるクライنزの「理由の形而上学」解釈のみならず、多くの(スターンを除く)修正版形而上学的解釈に通じるはずである。例えば、ヘーゲル論理学をウイトゲンシュタイン的な「論理空間」と捉えるガブリエルやコッホの解釈(Gabriel, 2013; Koch, 2014)、また、ヘーゲルの「概念」を「絶対的否定性」として理解するボウマンの解釈など(Bowman, 2012)。

う。だが、ストレートにヘーゲルの論述を受け取るかぎり、この主張はなかなか受け入れがたい。周知のように、ヘーゲルは若い頃、思弁哲学では「各々の犬や猫、それどころかクルーク氏の筆ペンさえ演繹されるべきだ」とする「常識哲学者」クルークの批判を一笑に付して退けているし（GW4,178）、カテゴリーは「単に経験的にのみ解されるのではなく、思考そのものから導出されるべき」だとしてカントを批判しているからである（GW20, 80）。反対に、『エンチクロペディー』緒論では、哲学的諸学と対比される経験的諸学を、「この〔経験的個別性や現実性といった〕可変性と偶然性の領域にあっては、概念ではなく、単に理由だけが妥当するものとされうる」と特徴づけている（GW20, 57）。

しかし、ヘーゲルの論述からの乖離よりも厄介なことは、著者が他の章では別の「概念」理解を提示しているように見えることである。第4章によれば、論理学でヘーゲルは、有限性と無限性など「主観と客観の対立を超えた論理的規定」に焦点を当てるべきだと考えている。さらに、現象と法則を論じた第7章は、「ヘーゲルの論理学が経験的理論そのものであることを意味しない」（183）、「経験的世界の個別具体的なあり方そのものが論じられているわけではない」（184）とまで断言している。そして、ヘーゲル論理学について、「自然哲学と精神哲学に含まれるような経験的探究のあり方について、それが最低限満たすべき形式的な条件を論じている」（184）という重要な指摘が、詳しく論じられることなく突然提示されるのである。もしそうであれば、ヘーゲルにおいて論理のカテゴリーと経験的概念は本質的に区別されないという第3章のテーゼは、いったい何だったのだろうか。

私見では、「全体論的構造」という名の下、第3章では認識のあり方が論じられていたのに対して、第4章ではヘーゲル哲学体系の構成性格が表現されているという、主題のスライドこそが混乱の大元であるように思われる。しかし、この点は3つ目の疑問点に関わるため、これ以上は掘り下げない。ここでは、「概念」をめぐる理解に不整合があるように見える点についてだけ疑問を呈しておきたい。

（2）ヘーゲルの「弁証法」について

第2に、弁証法の理解である。著者は、ヘーゲル哲学の方法を明らかにするために弁証法に着目する。周知のように、ヘーゲルの弁証法概念に特有なのはそれが矛盾や否定性を本質的な契機とするという点だが（GW12, 245-247）、不思議なことに、著者はこうした特性をほぼ考慮していない。そして、その結果、「弁証法が構成される」（99）や「弁証法が現れる」（100）といった奇妙な受動表現に表れているように、弁証法は能動的で内発的な運動性を失ってしまう。唯一、「弁証法は、第一義的には対立やそれによって駆動されるダイナミズムの存在を強調するための方法論である」（108）と触

れられる箇所はあるものの、その「ダイナミズム」の内実が説明されたり解釈に活かされたりすることはないのである。

こうした本書の特異な弁証法理解は、著者が弁証法に何を求めているかを顧慮すれば、一応説明が付く。著者は、弁証法概念に関する「最重要な議論」として「主観と客観の二元論への批判」(97)であること、そして、それが論理的規定に対応することにしか注目していない(99)。つまり、本論の論旨からして、弁証法概念は、論理学で論じられる規定性一般が主客二元論に囚われていないことを説明するために導入されているのである。(この意味での主客対立の廃棄はまさに『精神現象学』に課された課題であるが、ヘーゲルによれば、意識の諸形態の運動も「弁証法的運動」ではある。)著者にとって重要なのは、対立に陥っていないことであって、どのようにして対立を統一するかではない。それゆえ、統一のために不可欠な弁証法的運動には関心が向けられないのだろう。

しかし、それだけでなく、弁証法的運動を認めることは、著者にとって不都合なことでさえあると思われる。そもそも本書は、概念の運動やその必然性を「途方もないこと」として度外視しているのだから、その論理を説明するためにヘーゲルが弁証法を導入していることに触れるわけにはいかないのである。このことは、「概念の全体論的構造」が論じられていた第3章では弁証法に焦点が当たらなかった理由も説明してくれる。著者のいう「概念のネットワーク」は、固定的ではなく改訂可能性があると言説される一方で、一向に具体的な改訂のあり方は描写されない。ヘーゲルであれば、自己矛盾的な運動としての弁証法によって説明するところを、本書は目を瞑らざるをえないからだろう。

他方で、本論が「有限性」と「無限性」という論理的規定を具体例として挙げている点からして(99)、論理学の諸概念に弁証法を認めることもやぶさかではないように思われる。実際には、どういうわけか、カントを引き合いに出して、「空間」の認識に関連した独特の仕方で有限性と無限性の弁証法的関係が説明される(99-100)。そこにはやはり矛盾や否定性が登場しないが、ヘーゲル自身がそれらを弁証法の要だと考えている以上、何らかの弁明を必要とするだろう。

(3) ポスト・カント的解釈と形而上学的解釈との「調停」について

最後は、ポスト・カント的解釈と形而上学的解釈との対立をどのように調停しているのか、という問題である。なるほど、近年海外では、論理学の主観性概念に注目して両者の対立の超克を目指す研究(Zambrana, 2017, pp.292-294)や、ヘーゲル論理学を形而上学として解釈するピピンの著作(Pippin, 2019)が発表されており、当初は、修正版形而上学に懸念を示していたレディングさえ、「ヘーゲル的形而上学」がカントの批判哲学と両立可能であることを指摘するようになっている(Redding, 2020)。こう

した動向からすれば、説得的な「調和」モデルが提示された暁には、画期的な成果として世界的に評価されることは間違いない。

しかし、あいにく本書の主張ははっきりしたものではない。著者は、第2章で「私の結論は、認識論として読むべき箇所と形而上学として読むべき箇所の両方を含むヘーゲルの議論の全体を受け止めた上で、そのことの意義を粘り強く思考することが重要だ、というものである」（89）と予告し、第3章の考察の結果、「ヘーゲルの思想の中には[...]、認識論と形而上学のいずれかによって他方を基礎づけるのではなく、両者を相互に補い合うものとして捉え、両者の調和を目指すべきだ、という洞察」を見出したという（113）。ところが、ここでも「調和」は有機体モデル、相互依存・相互補完、暫定的だと言われるだけで、その具体相、構造や論理が語られることはほとんどない。

もっとも、この結論は、単に曖昧なのではなくて、極めて不可解である。著者の整理に従って、ポスト・カント的解釈と形而上学的解釈との対立を、「我々人間の認識能力をチェックし、それによって我々が何を知りうるのかを予め明らかにしておいてから、客観的な世界についての問いに移るという方法」か、あるいは、「そのような認識能力のチェックなどなしに、客観的な世界はどのような構造を持つのか[...]を直接問う方法」か、という対立だとしよう（109）。前者を採ると後者は採れず、後者を採ると前者は採れないのだから、これらはジレンマの関係にある。それに対して、本書は、クラインズの解釈に示唆を受け、理念章の弁証法の解釈に基づいて「論理的なもの」から始めるという第三の選択肢を提示した（109）。なるほど、論理的諸規定は主観と客観に対して中立的なのだから、この解釈によってポスト・カント的解釈と形而上学的解釈のジレンマは解消するかもしれない。しかも、それは、論理学から出発するヘーゲルの哲学体系の構成に沿っている！

ところが、この説得的な結論を、著者は自ら握り潰してしまう。つまり、「いずれから始めるのでもなく、また、第三のものを議論の絶対的な前提として認めるのでもなく、それらが相互に補い合う関係にあること、いずれがいずれを基礎づけるのでもない仕方でも両者を調和させることが目指されるべきであること、これが我々がヘーゲルから受け継ぐべき洞察なのである」（112）。だが、第三の「論理的なもの」から出発しないことがありうるのであれば、再びポスト・カント的解釈と形而上学的解釈とのジレンマに逆戻りしてしまうだろう。合理的に考えるならば、三つの立場は、相互依存的・相互補完的でも有機体的でもなく、排他的な関係にあるのであって、どの立場を採用するかが暫定的に任意に決まるということはいえぬ。このように理屈の通らないことを無理に通そうとするからこそ、本論の結論は一向に具体的な像を結ばない

のではないだろうか⁸。いずれにせよ、テキストに適合して論理的に一貫している唯一の解釈を自ら放棄する判断は、評者には理解しがたい。

さらに、こうした論理的にありえない帰結の解消を、ヘーゲル自身のテキストに押し付ける姿勢は特に受け入れがたい。著者によれば、「ある箇所では認識批判として解釈されうる叙述をし、他の箇所では認識批判を拒絶し、形而上学的な叙述もするというのが、ヘーゲルのテキストの実情」であり、ポスト・カント的解釈と修正版形而上学的解釈の対立は「ヘーゲルのテキストそのものに由来している」(29)。つまり、著者は、相容れない立場のどれを採用するかは、どの箇所を重点的に読むかによって変わってくると考えているのである。だが、仮にヘーゲルのテキストの「実情」がそうだったとしても、その上でヘーゲル哲学とは何かと考えたときにジレンマが生じる。だからこそ、世界的に論争になっているのである。そうでなければ、この論争は哲学的に無価値であり、取り上げる必要さえないだろう。

一般的に言って、著者のようなアプローチは、折衷主義と呼ばれるものである。確かに、テキストの元の文脈から都合のいい文言だけを取捨選択し切り貼りすることによって自分の「主義」を擁護する、一部の「ヘーゲル・ルネサンス」の議論が結果的に折衷主義的に見えることはある。しかし、テキストから乖離する代償を払ってでも、新しいヘーゲル像を具体的に打ち出すことに成功しているならば、そうしたアプローチを採用することは容認されるだろう。「ヘーゲル・ルネサンス」に触発された本書に期待されるべきは、いっそのこと、より大胆にテキストから離れて、真にオリジナルなヘーゲル像を展開することだったのではないだろうか。

凡例

略号 GW は、以下のアカデミー版ヘーゲル全集を表し、その後のアラビア数字は巻数とページ数を表す。Hegel, G. W. F. [1968-]. *Gesammelte Werke, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, Meiner, Hamburg.

文献表

- Bowman, Brady. [2012]. *Hegel and the Metaphysics of Absolute Negativity*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gabriel, Markus. [2013]. *Transcendental Ontology: Essays in German Idealism*, Bloomsbury, London.
- Koch, A. F. [2014]. *Die Evolution des logischen Raums: Aufsätze zu Hegels Nichtstandard-Metaphysik*, Mohr Siebeck, Tübingen.
- Pippin, R. B. [2019]. *Hegel's Realm of Shadows: Logic as Metaphysics in "The Science of Logic"*, University of Chicago Press, Chicago.

⁸ さらに本書の第 III 部に入ると、実はヘーゲル哲学は「一元論」でもあるという議論になる。第 I 部では、あれだけ出発点ないし原理が一義的に定まることを否定していたにもかかわらず、「一元論的な存在論への志向というヘーゲル哲学のもう一つの特徴」(246)が明らかになったという。だが、そもそもこの意味での全体論と一元論は両立するのだろうか。著者がどのようにしてこの決定的な論点を回避しているのか、評者には見通すことができなかった。

Redding, Paul, "Georg Wilhelm Friedrich Hegel", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2020 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2020/entries/hegel/>>.

田端信廣. 「直観」, 幸津国生, 滝口清栄, 久保陽一, 高山守, 山口誠一編, 『ヘーゲル事典』, 弘文堂, 1992年, 337-338頁.

Zambrana, Rocio. [2017]. 'Subjectivity in Hegel's Logic', in Dean Moyar (ed.), *The Oxford Handbook of Hegel*, Oxford University Press, Oxford, pp. 291-309.